

再会はエルム一通りで

佐藤 りえこ

1990 年から 4 年間、アテネに留学していたときのことです。予期せぬ人との再会を、同じ場所で、二度も経験しました。最初の再会は夏だったと思います。エルム一通りをシンタグマ広場に向けて私が「上って」いたとき、前方から足早に「下って」くる男性がいました。軽装で手荷物もわずか、すたすたと近づいてきたその人は竹島俊之先生でした。「やあ、高橋君」とまるで広島大学の構内で出会ったかのような挨拶。「お久しぶりです。お元気ですか。いつアテネに…」と尋ねようとする、と、「これからアレオパゴスの丘に行きます。それでは、頑張てね」とだけおっしゃって、まるでこれから講義にでも行くかのような調子で風のように去っていかれました。

二回目の再会は留学最後の年の 3 月でした。エルム一通りにあるカプニカレア教会の近くで思いもかけず、また竹島先生にお会いしました。私には先生もご存知の連れがいて、そのために少なからず動揺してしまいましたが、先生は一向に驚いたようすもなく、「これから 1 日クルーズ（エギナ・ポロス・イドラの三島をめぐるクルーズ）に行くんだ」とおっしゃり、最初のときと同様に、颯爽とエルム一通りを下って行かれました。

再会の喜びを分かち合う暇などないあつという間の出来事に、なんとなく物足りなさを感じていました。しかし、『プロピレア』に先生が書かれた紀行文を読み直しているときに、ふと気づいたことがあります。エルム一通りでお会いしたとき、先生は、20 世紀のアテネにその身を置きながら、時空を飛び越え古代のあるいはヘレニズムの時代にその心を遊ばせていたのではないかと。

竹島先生、あの時、アレオパゴスへの道すがら、パウロがアテネのひとびとに向かって説いた言葉—— *Tou γάρ και γένος ἐσμέν* 「確かに私たちもその子孫なのです」——を思い起こしていらっしゃったのではないのでしょうか。今となつては、こうお尋ねすることができないのが心残りです。